

# 弥生時代の“弩<sup>ど</sup>？”発見<sup>てんまつき</sup>顛末記

姫原西遺跡（B区）発掘調査年：1997・1998（平成8・9）年

池淵 俊一

平成8年の初冬、私は発掘調査の引継を受けるため、出雲バイパス予定地の姫原西遺跡の現場に立っていました。姫原西遺跡は現在の出雲バイパスの姫原高架橋があるところで、弥生時代から古代にかけての遺構・遺物が見つかっていました。

私が担当する調査区は古代の川跡があった所で、調査は測量を残すのみと聞いていました。先任の係長から説明を受けながら、私はふと、川跡の底に入れられたトレンチ（試掘の穴）の断面に目を奪われました。そこにはおびただしい数の木切れが顔を覗かせていたからです。

「あのトレンチ断面に見える木は何ですか？」「よくわからないけど、古代の層の下に弥生時代の川跡があるみたいだねえ。」「調査はほぼ終わっていると聞いていましたが…。」

残された調査期間は1ヶ月。その日から怒濤の日々が始まりました。ある程度予想はしていましたが、下層の弥生時代の川跡からは、おびただしい量の遺物が出るわ、出るわ…。特に木製品には、ジョッキ形の容器や、腰掛、椅子など、博物館で展示されているような製品が続々と出土。それらの遺物に目を配る余裕もなく、予定より1月遅れでようやく現場は終了しました。

その後、埋蔵文化財調査センターに戻って遺物整理を始めましたが、膨大な木製品のなかには用途がわからないものがたくさんあります。特に気になったのは、棒の先に円環のついた大型の木製品。いろいろ調べましたが全く手がかりがつかめず、途方に暮れていました。



姫原西遺跡出土の弩形木製品

そんなある日、ある調査員が図面を取るために水槽から件の木製品を取り出す際、ふざけてライフルを持つように構えているのを見て、はっと思い至りました。「これは古代中国の弩（洋弓・ボーガン）では？」　そういえば、弩専用のやじりである漢式三稜鏃を模倣した木製の鏃も一緒に見つかっている。実用品ではないにせよ、祭祀用に弩を模倣したものではないだろうか？

1999年5月の「国内初の弩を発見！」の報道に対して、研究者の中では「そんなもの出雲にあるわけがない」との冷やかな反応が一般的でした。それもそのはず、当時は、出雲では弥生時代の大陸系文物は皆無に等しかったからです。

「一度珍しい発見があると、似たような発見が相次ぐ」というのは、考古学世界での「あるある」です。2001年、松江市の田和山遺跡から国内初の楽浪郡系の石製硯が発見され、研究者の度肝を抜きました。ほぼ同じ頃、今度は出雲市古志本郷遺跡で本物の漢式三稜鏃が出土。さらに、その後の研究でジョッキ形容器は中国遼寧地方の容器を模倣した器物であることが明らかにされています。そして2002年から始まった出雲市山持遺跡の調査では、楽浪郡の土器がまとめて出土し、現在、出雲は北部九州に次いで朝鮮半島系土器が出土する、大陸との緊密な交流があった地域として全国から注目を集めるに至っています。こうした近年の発見や研究を踏まえて、この弩形木製品に対して新たな光があてられる日も近いのかもしれませんが。

(埋蔵文化財調査センター調整監)



弩形木製品の復元品